

ではマルコの福音書 8 章です。早速 1 節から 10 節までを通してお読みしますので皆さんも目で追って頂きたいと思います。『¹ そのころ、また大ぜいの人の群れが集まっていたが、食べる物がなかったので、イエスは弟子たちを呼んで言われた。² 「かわいそうに、この群衆はもう三日間もわたしといっしょにいて、食べる物を持っていないのです。³ 空腹のまま家に帰らせたなら、途中で動けなくなるでしょう。それに遠くから来ている人もいます。」⁴ 弟子たちは答えた。「こんなへんぴな所で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができましょう。」⁵ すると、イエスは尋ねられた。「パンはどれぐらいありますか。」弟子たちは、「七つです」と答えた。⁶ すると、イエスは群衆に、地面にすわるようにおっしゃった。それから、七つのパンを取り、感謝をささげてからそれを裂き、人々に配るように弟子たちに与えられたので、弟子たちは群衆に配った。⁷ また、魚が少しばかりあったので、そのために感謝をささげてから、これも配るように言われた。⁸ 人々は食べて満腹した。そして余りのパン切れを七つのかごに取り集めた。⁹ 人々はおよそ四千人であった。それからイエスは、彼らを解散させられた。¹⁰ そしてすぐに弟子たちとともに舟に乗り、ダルマスタ地方へ行かれた。』 1 節のところにもう一度目を戻して下さい。“そのころ”とあります。“そのころ”というのはちょうど 7 章の最後の末尾の 37 節を見て下さい。『³⁷ 人々は非常に驚いて言った。「この方の（イエス・キリストの）なさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない者を聞こえるようにし、口のきけない者を話せるようにされた。」』大いなる御業が、奇跡の御業がイエスを通してなされ、そのことを大勢の人たちが目撃したわけです。そしてそのことを大勢の人たちがまたあちこちで口伝いに、もうイエスのことを知らない人がいないほどにイエスの名声というものは轟いたわけです。それを受けて、『¹ そのころ、また大ぜいの人の群れが集まっていたが、』と。その噂でひと目イエスにお会いしたいし、またイエスに期待をして沢山の人がイエスの教えとか、またイエスの御業、それを間近で目にしたい、耳にしたいということで沢山集まってきたわけです。

そして 2 節に読んだ通り彼らはイエスについて三日間ずっとイエスを通して学んでいたわけです。良い知らせ、福音、神の国の到来。旧約聖書からイエスは沢山のことを彼らに教えたわけです。でも、彼らはそれほど裕福ではなかったので、食べ物を持っていなかったとあります。もう一つ注目して頂きたいのは、三日間もイエスについて回ってイエスから教えを乞うている中で彼らは食べることもしなかった。否、むしろ食べることをすら忘れてしまったかと思われれます。でも、そんな姿を見てイエスは、かわいそうに思われたと 2 節にあります。空腹のまま帰らせたなら途中でそれこそ倒れてしまうかもしれない。家までたどり着けないかもしれない。彼らが空腹でひもじい思いをしている。彼らの体力が確実に落ちているということをイエスは察したのであります。そのようにイエスは私たちのことを常に気に掛けて下さる。私たちの食べるパンについてもイエスは気に掛けて下さる。私たちの肉体の必要においてもイエスは心配して下さるということです。このことを私たちも覚えたいと思います。今日のあなたの食事に関してイエスが気に掛けておられます。私たちのニーズ・必要にイエスは常に目を注いで下さっているということです。以前にも私たちは同じような奇跡を見てきました。その時は 5,000 人の給食ということで、男の数だけで 5,000 人ですから女子供を入れたら 1 万 5,000 人以上は居たと思われれます。同じようなシチュエーションでその際には弟子たちの方からイエスに心配して相談したのであります。「ここはもうへんぴなところですし、もう時間は夕方になってきておりますから、もうお店も開いていない。しかもへんぴですから食べ物を調達することも出来ないし、この人数ですからすべての人の腹を満たすにはとても資金は足りません。」と。それを持ちかけたのはイエスではなくて弟子たちの方からでありました。6 章 35～36 節にそのことが記録されております。でも今回のケース、これは全く別のケースです。4,000 人の給食というところですが、イ

エスの方から群衆のことを心配して、そして弟子たちに「どのようにして彼らを助けてあげられるか。彼らの空腹を満たしてあげられるか。」という話を持ちかけております。5,000人の給食の方では弟子たちの方から、4,000人の給食の方ではイエスの方から群衆たちのニーズを気遣って、心配して、相談するという大きな違いがあります。その違いは一体どこから来ているのかというところもおいおい触れていきたいと思えます。ですから皆さんの頭の中では5,000人の給食の場面と4,000人のこの給食の場面。6章に記録されているものとの8章に記録されているところを是非比較をして、その違いにも是非注目して頂きたいと思えます。

“**かわいそうに思われた**”という言葉は、皆さんにももう何度もお伝えしている有名なギリシャ語の「**スプラクニゾマイ**」という言葉です。是非覚えて下さい。「スプラクナ」という言葉から派生しています。

「スプラクナ」というのは「内臓、はらわた」であります。ユダヤ人にとって内臓というのは、感情の座を表します。これは日本人も同じ感覚を持っています。同じアジア人ですから「はらわたがわななく」とか「断腸の思い」とか。この「**スプラクニゾマイ**」という言葉は、ですから「はらわた」から来ている、「内臓」から来ているわけです。内臓が揺れ動かされる。もう感情が動くような、そういう時に使う言葉です。「はらわたが痛む、わななく」といったような言葉です。別の箇所ではこの「**スプラクニゾマイ**」という言葉は「**深く憐れむ**」というふうに訳されます。最も強い憐れみの表現です。「憐れむ」という言葉は他にもあるんですけども、その中で最も強い激しい憐れみの表現です。イエスが空腹な群衆を見て、もうはらわたがわななくほど、内臓が揺れ動くほどにその感情が揺さぶられたと。あなたのことを見てイエスはそのように感じて下さるんです。これは凄いことです。神があなたを見て、ひもじい思いをしているあなたを見て、空腹なあなたを見て、弱り果てているあなたを見て、内臓がわななくと。はらわたがわななく。激しい強い憐れみの感情を抱いて下さるということ。これは驚くべきことです。

そしてこれはイエスの御業ですけども、私たちもイエスを信じるイエスの弟子として、キリスト者として、イエスのミニストリーに見習うべき者として、ここからも学んで行きたいと思えます。毎回イエスが行われることは私たちのミニストリーの模範だと考えて下さい。常に私たちが神の働きを成したいと願う時には、イエスがどのように成されたのか。イエスのやり方、イエスのその模範というものを見習うべきであります。

ここで1つ注目して頂きたいのは、イエスはこの群衆を餌で釣ったのではないということです。要するに食べ物で釣って群衆を集めて、「ただでご飯をあげるから集まりなさい。配給してあげるから、給食してあげるから集まって来なさい。」そうではないです。イエスは一切食べ物のことは言わずに、「無料で食べ物が食べられます。」みたいな宣伝文句を無しに、ただイエスを求めてきた人たちに対して三日間ねんごろにご自身のことを証しされ、聖書ことを説かれたわけです。彼らはそれこそ寝食を忘れるようにして三日間もイエスと一緒に時間を過ごしたのであります。彼らが求めていたものは食べ物ではなかったということです。でも、私たちはともすれば餌で群衆を釣ろうとします。これは食べ物を餌というだけではなくて、「人々の何らかの必要を満たしてあげるから。このようなボーナスがあるから。このようなメリットがあるから。このような御利益があるから。」いろんな餌で人々を寄せ集め、そして大集会などを開こうとするわけです。でもそれはイエスのやり方とは違うということです。具体的に食料を配給して行うミニストリー、ホームレス伝道なんかもそうです。「食べ物をあげるから皆集まっておいで。」と言って、福音のメッセージを語って、それまではずーっとホームレスは我慢して聞いているわけです。私もそれに携わったことがありますけれども。勿論それが全く悪いと言っているわけではないですけども、イエスのスタイルとは違うということだけを伝えておきたいと思えます。イエスが食べ物を分け与えたのはあくまでその前からイエスに付き従ってきた人たち、その前からイエスの御言葉を慕い求めて来た人たちに対してまずそれを行ったということです。

ガラテヤ人への手紙 6 章 10 節を参考に皆さんに見て頂きたいと思います。『ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょう。』「特に信仰の家族の人たちに善を行いましょう。」とあります。クリスチャンであればすべての人に対して善を行うべきではありますが、でもとりわけ私たちは信仰の家族に真っ先に最優先で善を行うべきだと言っているわけです。今の物語の中では、その信仰の家族というのは言わば「イエスを慕い求めて、イエスの御言葉を聞きたい。」食べ物がなくとも、腹が減っていても、3 日間でもずっとイエスについて回って、でも肉体は弱いですから食べないではいられないわけです。でも彼らが優先したのは、イエスとの時間です。彼らが目当てにしていたのは、食べ物ではありません。イエスの方から彼らのニーズに気付いて、このまま空腹のままで帰すわけにはいかないと。ひもじい思いをして。御言葉を慕い求める人たちに対してイエスは特に善を行われたということです。そうでない人たちにもイエスは善を行ないますけれども、特に信仰の家族、特に兄弟姉妹と呼ばれる人たち、特に教会に集まる人たち。彼らに私たちは善を行うべきだということを忘れてはいけません。優先順位というのがあるということです。バランスも必要ですが、特に信仰の家族、主を求めている人たち、まだ求道者でもイエスのことをもっと知りたいという人たちに善を特に行うべきだということです。そうでない人たちも勿論食べ物がなく苦んでいる人たちもあるわけですが、その辺を私たちも迷わずに聖書に従って、まずは特に信仰の家族と呼ばれる人たち、そのカテゴリーに入る人たちに善を行うべきで、そして次にすべての人たちという部分に注目して頂いて、なるべくイエスの模範に従って行きたいと思います。

そして使徒の働き 3 章のところにも生まれつき足の効かない人が登場して、その時にペテロとヨハネは彼の前を通って、彼が物乞いしているのを見て言ったんです。「**私たちには金銀は無い。**」と。でも実際には金銀はあったんです。2 章を見て頂くと大勢の人たちが自分たちの財産を持ち寄って弟子たちの足元に置いて、そして弟子たちには沢山のお金が集まっていたんです。なぜそのようなお金が集まってきたかと言うと、ペンテコステの祭りに世界中から巡礼に来た人たちがペテロの説教を通じてイエス・キリストを信じたわけです。クリスチャンの共同体がそこにいきなり生まれたわけです。3,000 人の人たちが大挙して救われたわけです。彼らはすぐには帰らずにしばらくエルサレムにとどまったわけです。勿論家もあります。ですから皆お金を持ち寄って、そこに集まっている人たちが共同生活出来るように、「もう自分の財産なんかないんだ。私たちは家族だから皆でお金を出し合って、食べ物がないように皆で分け与えて、一緒に教会としてしばらくエルサレムに逗留出来るように。」そういうお金が集まってきたわけです。にもかかわらずペテロとヨハネは「**私たちには金銀は無い。**」と。つまりそれ以外にその集まった資金を使うつもりはないということです。信仰の家族以外にその集まったお金を使うつもりはなかったわけです。でもこの生まれつき足の効かない人はそこで施しを乞うていたわけです。その時にペテロが言った言葉は「**イエス・キリストの名によって立って歩きなさい。**」と。「**金銀は無いけれども、私たちにあるものをあげよう。**」と。それは勿論お金以上に尊いものだったわけです。イエスの名によって歩くということ。イエスの名によって生きるということ。これ以上に尊いことはありません。その日暮らしが出来ればかなお金を分け与えるよりも、イエスの名によって自分で歩けようになる、自分で生活出来るようになる。イエスによって自立出来るようになる。それをまたペテロを通して神様は成されたわけです。そういった例も参考になろうかと思えます。金銀は無いというのは、厳密にはすべての障害者、すべての貧民に対して施すようなお金はないと。その集まったお金はあくまで信仰の家族を養うための資金であって、先にそちらが優先されるということです。人々は一切イエスにパンを求めておりません。逆にイエスの方が彼らの必要を見て、彼らのことを気にかけて、そして必要を満たして下さるというのがこの 4,000 人の給食の奇跡であります。

詩篇 37 篇 25 節も参照して頂きたいと思います。これをすべてのクリスチャンが忘れてはならない約束

の言葉として心に刻みつけて頂きたいものです。『私が若かったときも、また年老いた今も、正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。』『正しい者が見捨てられたり、その子孫が食べ物を請うのを見たことがない。』“正しい者”というのは完全無欠な人という意味ではありません。神の目に正しい者、つまり信仰において義と認められた正しい者です。平たく言えばクリスチャンが食べ物を請うのを見たことがないと。なぜならばイエス・キリストが私たちのパンのニーズをいつも気に掛けて、気に留めて面倒見て下さる方です。イエスの方からかわいそうに思われて、イエスの方から深い憐れみを感じて動いて下さるからです。

そしてテキストに戻って頂きたいと思います。「こんなへんぴな所」と言われていますがどんなところかと言いますと **7章 31節**では、そこはデカポリス地方だとあります。デカポリスというのは巨漢の警察官という意味ではありません。前に話した通り“デカ”というのはギリシャ語の「10」。刑事ではありません。“ポリス”というのは「町、都市」です。10の都市。これはギリシャ文化、またギリシャ神話といった影響の色濃いところで、また当時はローマの属州でありましたから所謂グレコローマンの町だったわけです。異邦の世界です。異教徒が多く暮らしていた地域であります。そこでは豚が飼われたりしていたわけです。ユダヤ人が忌み嫌う豚が飼われるような地域、それがこのデカポリス。そしてこの**マルコの福音書**の読者は実はローマ人です。**マタイの福音書**はユダヤ人を対象とし、**マルコの福音書**はローマ人を対象とし、**ルカの福音書**はギリシャ人を対象として、**ヨハネの福音書**に関してはそのすべての人を対象とする福音書であります。特にマルコはローマ人を意識していますので、このデカポリスには少し重点を置いているわけです。ローマ人でもイエスに触れていただける。ローマ人でも異邦人でもイエスは憐れみを感じて、そして救って下さる。ローマ人の読者はこの箇所を通して大いに励まされたと思います。私たちはユダヤ人ではないのに、私たちと同じような人たちがイエスから憐れみを受けて、そしてイエスにこのような大きな御業を成して頂いていると。私たちもその異邦人の部類ですので、大いに励まされると思います。「この人たち」というのは非ユダヤ人です。ですから私たちもこの 4,000 人の給食の中に自分を重ねて、イエスは私たちの間でも力強い御業を成して下さる。私たちの必要を見て心動かして下さって、そして神しか出来ない御業を私たちにも見せて下さる。そして私たちの必要も満たして下さる。それが私たちの救い主イエス・キリストであるということです。

そして、7つのパンを使って 4,000 人の給食をなさるんですが、**6節**に「**群衆に、地面にすわるようにおっしゃった。**」とあります。*印が新改訳聖書は付いています。下を見て頂くと直訳として「**体を横にする**」とあります。地面に体を横にする。当時のごろ寝食いをしたわけです。最後の晩餐もそうです。ごろ寝食いをして横になって食べたわけです。でも同時にこれは羊がまさに牧草地に伏せているような、「緑の牧場に伏させ」と**詩篇 23 篇**にあります。ですからまさに羊飼いが羊を養って下さるような、そんな場面であります。そして、7つのパンを取って、感謝を捧げてからそれを裂きと。ここに私たちが食前に感謝を捧げる根拠があります。イエス・キリストもご飯を食べる前に、食前に感謝を捧げて、それからです。7つのパンで何が出来るのかと。4,000 人、おそらくこれは男の数だけで 4,000 人ですから女子供を合わせたら何万人いたと思いますが、でもそれでもこのわずかな 7つのパンをもって、これを神に感謝をしております。私たちは感謝を忘れやすいです。感謝をしないから神の御業がなかなか成されていないのかもしれない。「**すべてのことについて感謝しなさい。これがキリスト・イエスにあって神があなたがたに望まれていることです。**」とパウロは言いました。厳密には「**すべてのことにおいて感謝しなさい。**」と。どんな状況においても私たちは感謝出来ることがあるはずです。そしてこれは命令です。すべてのことについては感謝出来ないと思います。サタンについて感謝しなさいと言われても、勿論出来ないはずです。愛する人を亡くしたことについて感謝しなさい。ノンクリスチャンだったらそれは難しいかもしれませんが、でも、**すべてをことにおいて感謝しなさい**、ならば誰でも出来るはずです。どんな状況にあっても、すべてがな

くなくても、どんなにひもじくても、感謝は尽きないと思います。どんな状況においてもイエスが共にいて下さるならば感謝は出来るはずです。イエスこそが命のパンです。このお方が既に与えられているから私たちはいくらでも感謝出来る。感謝出来ない人はこの中に 1 人もいないと思います。感謝出来ないのではなくて、感謝しないだけです。感謝しなさいという命令に逆らっているだけであります。

そして、その後人々に配るように弟子たちを用いられました。私たちのミニストリーというのはまさにイエスの手から預かったものをただ分け与えるだけです。パンを配るぐらいなら誰でも出来るはずです。「ミニストリーなんかとても私には。とても神の働きなんて私には担いきれません。私はふさわしくないから。そんな能力もないし、またそのような訓練も受けてないから。」と躊躇する方もあると思いますけれども、でもパンを配るぐらいなら誰でも出来ると思います。子供でも出来るはずです。それは自分がどこから調達してきたパンではありません。イエスの手から託されたパンです。でもこのパンは驚くべきパンです。たった 7 つしかなかったのに、イエスの御手の中で何倍にも何十倍にも何百倍にも増えて、それが配られていくわけです。魚も干し魚ですけれども、これも同じようにして配られていきました。そして人々は充分食べて満腹したとあります。

「そして余りのパン切れを七つのかごに取り集めた。」とあります。5,000 人の給食の場面では 12 のかごにいっぱいになったとあります。6 章 43 節にそう書いてあります。ただその時の“かご”と今回使われた“かご”は全く別の種類のかごであります。「七つのかご」の“かご”という言葉は「スプリース」というギリシャ語で、これは大型のかごです。同じ言葉が使徒の働き 9 章 25 節にも使われております。そこではダマスコというところでパウロが迫害されて、パウロが難を逃れるためにかごに乗せられて城壁から吊り下ろされるということが成されます。人間が、大の男が 1 人すっぽり入るようなかご。昔かごで人々はあちこち旅行したわけですがけれども、その人の乗るようなかご。それが 7 つのかごであります。一方で 6 章 43 節の 12 のかごは「コフィノス」という言葉で、まさに小さなかごです。ランチボックスのようなかごです。ですから 12 のかごと聞くとそちらの方が量が多かったように聞こえますけれども、7 つのかご、数は少ないですがそれは大型のかごで人間が入れるような巨大なかごであったということが分かると思います。4,000 人とありますが、4,000 という数も少ないようですが、聖書で 4 という数字は世界を表します。四方の 4、東西南北の 4。それは世界を表します。そして、ここは舞台がデカポリスですから、イエスの全世界の救い主。イエスご自身も「いのちのパンです。」とご自身おっしゃっていますから、イエスがいのちのパンとして全世界に配られた。イエスは全世界の救い主であると。そして人々はイエスを食べるならば、必ず満腹するということです。またパンは御言葉というふうにも象徴的に解することが出来ます。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によるのです。」と。そのパンを食べるならば誰でも満腹します。だれでも満たされます。そしてそれは有り余るほどになります。自分から溢れるほどになります。それをまた私たちは配ることも出来ます。

そして 5,000 人の給食の時には対象はユダヤ人でした。ガリラヤ湖の周辺で行われたわけですから。そこに集まった群衆はユダヤ人でした。その一方で 4,000 人の給食の際に集まった群衆は、デカポリス地方の異邦人です。或いはユダヤ人でも限りなく異邦人に近い生活をしていたような、言わば霊的に墮落していたような人たち、世俗的な肉的なユダヤ人と言っていいと思います。先に給食が行われたのはユダヤ人からです。その後には異邦人という順番。ここにも注目して下さい。イエスは「わたしはイスラエルの家の滅びた羊の家に遣わされている。」というふうにおっしゃって、優先順位はまずユダヤ人伝道であると。その次に異邦人と。それは優劣があるというわけではなくて、イエスのミニストリーには常に優先順位があるということです。先ほども信仰の家族がまず優先だと言いました。ミニストリーを行う際に私たちが気を付けなければいけないことは、この優先順位というものです。すべての人のニーズに応えることは出来ません。効率の良い神の御心にかなった秩序あるミニストリーを展開したければ、私たちは聖書の事例に従っ

て、イエスの模範に従って、その中に優先順位があるならばそれをきっちり守っていく。そうでないと私たちは効果的なミニストリーは出来ないと思います。或いは秩序を失ってしまうかと思います。それは継続出来ないほどに。もう何もかもいっぺんにということになれば、疲れ果ててしまうかと思います。

次にその 4,000 人の奇跡からイエスはまた教えを展開されていきます。ただ奇跡を行なうだけではなくて、それらにはちゃんと象徴的な意味があって、またそれらをさらに弟子たちの信仰を深めるために活用されるということなさいます。10 節のところでは「**ダルマヌタ地方へ行かれた。**」とあります。これはガリラヤ湖の西岸です。マグダラという町が近いですが、このダルマヌタというのが現在のどの町にあたるのかは不明とされています。ただマグダラというマグダラのマリヤの出身地です。そこに近いところだろうと言われております。イエスはユダヤ人だけではなくて異邦人のことも気に掛けて下さって、そしてユダヤ人の間だけではなくて、異邦の間でも驚くべき奇跡の御業を成して下さい、そしてその時に異邦人の持っていたものまでもお用いになられたということです。7つのパン。これはデカポリスの異教徒たちの持ってきたパンです。私たちのような異邦人の持ち物でも、イエスはご自身の御業のために活用して下さいということを知ると、大いに励まされると思います。私には大したものはありません。大した才能もありません。賜物もありません。でも、こんな私の持ち物でもイエスは用いて下さるということ。ルカの福音書 5 章では、イエスのペテロの舟を一艘借りました。そして船の上からメッセージをされたわけです。その前にペテロたちはガリラヤ湖で漁をしていたわけですが、その仕事の中に群衆が集まって来たので、舟を借りなければメッセージ出来なかったわけです。そのメッセージの後イエスはペテロに対して「**網を下ろして魚を取りなさい。**」と。それまでも網を下ろして魚を一生懸命捕ろうとしていたんですが、でもなかなか網にかかってこなかったわけです。でもイエスがおっしゃるんだから、素人の大工さんだけでも、まあとりあえず聞いておこうかと。そして、実際に網を下ろした途端に2艘であたっても載せ切れないほどの大量の魚が自ら網の中に入って来たと。驚くべき大漁の奇跡が行われたわけです。何が言いたいかと言いますと、イエスに貸したものの、イエスの手に渡したものは、ただでは返って来ないということです。沢山のおまけが付いて。イエスに貸しを作るということは絶対ないということです。イエスが7つのパンを貸して下さい。イエスが一艘の舟を貸して下さい、とってそれを貸したら、損は無いということです。驚くような利息と言いますか、そのまま貸したものが返ってくるだけではないということです。それ以上のもの、計り知れないものが返ってくる。絶対に私たちがイエスにお渡ししたものの、それは無駄にならないどころか、ただ活用して頂けるどころか、私たちに計り知れない祝福ももたらすということです。そして忘れてはいけないことは、イエスに貸しは絶対に作れないということです。

そんな奇跡を弟子たちは目の当たりにしてその地を去って行ったわけですが、11 節を見て下さい。『**パリサイ人たちがやって来て、イエスに議論をしかけ、天からのしるしを求めた。イエスをためそうとしたのである。**』天からのしるしと言われるものは、地上のしるしとは異なるというものです。“しるし”という言葉はギリシャ語では「**セーメイオン**」と言って「証拠としての奇跡」という言葉です。今までイエスは沢山のしるし、メシアとしての、証拠としての奇跡を沢山成してきたわけです。でもそれをもってしてもパリサイ人たちは信じようとしなかった。それは地上で行われたしるしだったからです。イザヤ 35 章 5～6 節にメシアとしてのしるしはどういうものか。証拠となるものはどんな奇跡なのかということが予め預言されておりました。『**5**そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。**6**そのとき、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ。』

また同様の預言はイザヤ 61 章 1 節にも見られます。『**1**神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え（グッドニュースです。福音を伝え）、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、**2**主の恵みの年と』ここ

までイエスは実は引用されてナザレの会堂でメッセージされたわけです。今ここに書かれていることはこのわたしにおいて成就している。わたしこそが聖書に約束されている神から遣わされたメシアであると証しされたわけです。本来これをもってパリサイ人たちは勿論聖書の専門家ですから、イエスのなさっている一つ一つの御業、病人の癒し、奇跡を見て、間違いなくこの方こそ聖書に約束されているメシアだと素直に信じるべきだったわけです。でも、彼らはそれでは満足しなかったのです。そうしたしるしは全部地上のしるし。もっと凄いしるしを見せて欲しい。天からのしるしを見せて欲しいと。キリがないです。実は奇跡というものは、必ずしも信仰を生むものではないということを皆さんに覚えて頂きたいと思います。多くの人たちは「奇跡を見せてくれたら神を信じる。」と、そういう言い方をします。でも実際には奇跡というものは、信仰を生まないんです。奇跡はあくまで信仰の結果起こることです。奇跡というのはまた新たな奇跡を見たがるようにさせるだけです。一度奇跡を見ると、また見たい、もっと見たい。どんどんその欲望はエスカレートするわけです。そして奇跡が起こっていないと何か気が済まない。ある教会では毎回のように何か奇跡を行います。病人が癒される、歩けなかった人が車椅子から立って歩き出すとか、又は歯が生えてくるとか、いろいろ毎回の集会で奇跡を起こして、人々は毎回毎回奇跡が起こることを期待して集まって来るわけです。でも、ほとんどは奇跡見たさに人々は集まって来るわけです。奇跡が起こっていることによって神が動いておられる、神が働いておられるというふうに彼らは思ってしまうんですけども、奇跡がなければ彼らは満足しないわけです。ですから奇跡というのはさらなる奇跡をただ期待させるだけであって、信仰を生み出すわけではないということです。むしろ信仰は聞くことによって生み出されていきます。ローマ 10 章 17 節にある通り「**信仰は聞くことから始まり、聞くことはキリストについての御言葉によるのです。**」と。御言葉を学ぶことによって初めて信仰というものは生まれるのであります。奇跡を見るだけで信仰が生まれると思ったら大間違いです。この何かのしるしを見せてくれと要求するということは、実は彼らがイエスを信じていないことを証明するものだということも覚えて頂きたいと思います。このパリサイ人たちはイエスを信じたくて天からのしるしを要求しているわけではないということです。ここに書かれている通り、イエスに議論を仕掛けてイエスを試すという目的で天からのしるしを要求したわけです。イエスを審問する手段として天からのしるしを要求しているわけです。信じるつもりは頭からない。イエスをメシアとして認めるつもりはさらさら無いということです。私たちもとすれば奇跡を求めて、そしてただマジックショーのように奇跡が見ただけで教会に集うとか、集会に集まるとか。勿論そこで感動して、その時には拍手して涙したりするわけですが、でもそのようなことが健全な純粋な信仰を生み出すわけではないということです。

そんな彼らを見てイエスはどのように感じられたかと言いますと、12 節にある通り『**イエスは、心の中で深く嘆息して、こう言われた。「なぜ、今の時代はしるしを求めるのか。まことに、あなたがたに告げます。今の時代には、しるしは絶対に与えられません。」**』“心の中で”という言葉は直訳すると「**霊の中で**」深く嘆息してと。同じ言葉が 7 章 34 節に使われているというところに注目して頂きたいと思います。ただ 7 章 34 節の「**深く嘆息する**」という言葉は前回説明したとおりギリシャ語は「**ステナゾー**」という言葉です。単純に「**ため息をつく**」とか、また「**うめく**」聖霊がうめくという時にも使う言葉です。でもこの 8 章 12 節の「**深く嘆息する**」という言葉は別の言葉です。「**アナステナゾー**」という言葉です。「**ステナゾー**」という言葉に「**アナ**」が付いています。そこの違いというのは、同じ「**ため息**」とか「**うめく**」という言葉であるんですけども、「**アナステナゾー**」という言葉になりますと「**胸の奥底から出る深いため息**」、特にこれは心の中での話ですから、霊的な話です。霊的に心の奥底から深くため息をつく。前回はこの「**嘆息**」というのを、「**憐れむうめき**」というふうに解しました。でもここではパリサイ人たちに対しては、「**霊的に深く心から嘆いてため息をつく**」という使い方になっております。彼らの何を嘆いたかと言えば、彼らのその頑なさです。御言葉によってイエスがメシアであることはもう証明されているはずですが、

は御言葉に書かれている通りのことを約束のメシアとしての働きを繰り返し繰り返し彼らの目の前で行って見せたわけです。それでも彼らは信じようとしなかったのです。その不信仰に対してイエスは、霊において深く嘆きを持ってため息をつかれたわけです。何度も何度も福音を宣べ伝え、何度も何度もイエス・キリストのことを証しし、その人も神が生きて働いておられるというところを目撃しているんです。教会にも行っているんです。聖書も読んでいます。なのに信じない。そういう時イエスはどうかされるかと言うと、霊において深く嘆きを持ってため息をされるということです。私たちが頑なに拒む人たち、あからさまに不信仰を表明する人たちを前にすると、同じような感情を抱くと思います。胸の奥底から本当に嘆きを持って、その頑なさ、その不信仰さを嘆くということがあります。イエスもそうされるということを見て頂きたいと思います。

そしてしるしを求めるのは、その人が不信仰であることの証拠だというのは、**第一コリント 1 章 22 節**で明らかです。『ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。』ですからもうしるしを求めること自体、その人が不信仰であることの証拠だということです。「奇跡を見せてくれたら神を信じる。」なんて言う人は、もう最初からほとんど信じるつもりがない人のセリフだということです。そういう頑なな人たち、不信仰な人たちを見るとイエスは霊的に深く嘆くと。ため息をつかれるということです。ミニストリーにおいてこれは避けられないということも覚えて頂きたいと思います。

そしてまたテキストの方に戻って頂いて **13 節**。『イエスは彼らを離れて、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。』西から東に移動されたんですが、ここで読み過ぎしてしまいがちなフレーズに注目して下さい。「**イエスは彼らを離れた**」とあります。イエスが離れて行くというのは、これは怖いことです。イエスが自分から離れて行く。考えるだけで怖いことです。恐ろしいことです。彼らというのは勿論、ここで言われているパリサイ人たちです。パリサイ人たちとはどういう人たちだったか。何度も繰り返して強調しますが、彼らはイエスに議論を仕掛けた人たち。信じるつもりはさらさらしない。ディベートをする、質問とかけます、興味を持っているように見せます。まるで群衆たちの 1 人のように、求道者のように振る舞います。でも彼らは天からのしるしを求めて、イエスを試そうとしたわけです。そういう人たちからはイエスは離れて行くということをここで確認して頂きたいと思います。イエスが離れるならば、私たちが離れなければいけないということです。「なんとしてでもこの人には救われて欲しい。」そう願うのは、あなたも私も同じです。特に自分が愛している人たち、身近な人たち、大事だと思っている人たち。彼らには何が何でも救われて欲しいと願うわけですが、でももし彼らがパリサイ人たちのようになってしまえば、イエスは彼らから離れるんです。そしてイエスが離れるならば私たちがそこに居てはいけないということです。私たちが舟に乗って向こう岸へ行かなければいけない。向こう岸ではイエスを必要としている人たちが大勢待っているからです。渴きを持って待っているからです。なのに私たちの多くは動かずにまだパリサイ人のような人たちを相手に一生懸命ディベートするわけです。議論するわけです。彼らの要求に対していろいろ応えようとするわけです。その都度、霊において深いため息をついて、嘆いて「ああどうしてなのか。なぜ救われないのか。どうして素直になれないのか。どうして分かってくれないのか。目の前でこんなに神様が生き生きと働いておられるのに。どうして、どうして。」と。疲弊してきます。疲れてきます。徒労に終わって水泡に帰して私たちは「一体自分は何をしているのか。」と。でもイエスを見て頂くと、「**イエスは彼らを離れて、また舟に乗って向こう岸へ行かれた。**」とあります。私たちにリソースは限られているということをもう一度覚えて頂きたいです。パンだって 7 つしかないわけです。無尽蔵にあるわけではありません。無限じゃないんです。時間も同じです。私たちの時間も限られているということです。この時間も神から頂いている賜物ですから、体も 1 つしかありません。ガリラヤ湖の西と東にそれぞれ分かれて働くことは出来ないわけです。時間だって限られている、パンだって限られている。でもそれを私たちは有効に、神の栄光を現わすためにミニストリーにもそれを活用していく必要があるわ

けです。ですからしっかりと私たちがイエスの模範に従って、優先順位をわきまえるということ。そしてまた、そのミニストリーの対象。これもしっかりと吟味して、この人に対して、この人たちに対してどれだけの時間を使うのか。そして他にも沢山ニーズを抱えている人たち、特に信仰の家族の人たちもあるわけです。その人たちをなおざりにしながら、放っておきながら、あの人にもこの人にもなんてやっている、私たちはそれこそ御心から外れた働きをして、空回りばかりをして、肉の思いだけで働いてしまって、感情だけで動いてしまって、やる気とか、意欲とか、チャレンジ精神とか、または義務感とか、そういったことで私たちはやつれてしまうわけです。疲れ果ててしまうわけです。そういう時、人となられたイエス・キリストが残された模範にもう一度立ち返るべきであります。そうすればイエスと同じように効果的なミニストリーを展開出来ますし、ミニストリーは途中で止まらないということです。中途半端で終わらないで継続していくということです。

もう一度 14 節の方に目を移して頂きたいと思います。『¹⁴弟子たちは、パンを持って来るのを忘れ、舟の中には、パンがただ一つしかなかった。¹⁵そのとき、イエスは彼らに命じて言われた。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。」¹⁶そこで弟子たちは、パンを持っていないということで、互いに議論し始めた。』パン種問答であります、ここで「互いに議論し始めた」とあります。誰がパンを持ってこなかったのか。沢山有り余っていたはずなのに、誰が持ってこなかったのか、誰が忘れたのか。お前が悪い。あいつが悪い。お互いに責任を擦り付けるような、責任転嫁するような、そういう議論を始めたわけです。互いに議論をし合う、これは大変危険なことだということをお伝えしておきたいと思えます。「誰がパンを持ってこなかったのか。これは誰の落ち度なのか。これは誰の失敗なのか。誰の過ちなのか、誰のミスなのか、誰の罪か。」そんなことをいつも議論していると、私たちが畏にはまります。イエスはそんなことはどうだっていいと。パンを忘れたことで私たちは、そんなつまらないどうだっていいことで議論を始めるわけです。そしてお互いに責任転嫁を始めるわけです。そんなことで神のミニストリーは勿論前に進まないわけです。でも日本人は大好きです。反省会をしましょうとか、議論し合うわけです。それは時として建設的ではありません。破壊的です。お互いの足を引っ張り合うようなもの、責任を擦り付け合って、そしてそれは不毛な議論に終わってしまうわけです。

ヤコブ 1 章 5 節にこのような素晴らしい約束の聖句があります。『あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。』こういう約束があるのに私たちは議論するわけです。知恵のない者ならば、知恵に欠けた人があるならば、こんなに素晴らしい約束があるということを忘れてはなりません。「どうしたら良いか分からない。じゃあ議論しましょう。じゃあ会議しましょう。じゃあディスカッションしましょう。」それは私たちです。どうしたら良いか分からない。そういう時に私たちがすべきことは、この聖書の約束に従って「だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願う」ということです。神の知恵を求めるということです。でも、それをせずに私たちは互いに議論をしてしまうものだという事です。

17 節。『¹⁷それに気づいてイエスは言われた。「なぜ、パンがないとって議論しているのですか。まだわからないのですか、悟らないのですか。心が堅く閉じているのですか。¹⁸目がありながら見えないのですか。耳がありながら聞こえないのですか。あなたがたは、覚えていないのですか。¹⁹わたしが五千人に五つのパンを裂いて上げたとき、パン切れを取り集めて、幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「十二です。」²⁰「四千人に七つのパンを裂いて上げたときは、パン切れを取り集めて幾つのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えた。「七つです。」²¹イエスは言われた。「まだ悟らないのですか。」』と。イエスはパンにこだわっていたわけではないです。「わたしが奇跡で増やしたあのパンを、お前たち忘れたのか。もったいないじゃないか。」そういうことをイエスはおっしゃりたかったわけではないです。「ここにもひとつのパンがある。」と、それで充分です。5つのパンから 5,000 人がお腹いっぱい食べれたのに、

しかも有り余って 12 のかごにまでお土産が付いたのに、1 つのパンで何を騒ぐのかと。1 つのパンさえあれば少なくとも 1,000 人分のパンが、プラスお土産も付く。今ここには 12 人足らずの、イエスを含めれば 13 人という弟子たちの一行だけです。1 つのパンで充分ではないか。どうして悟らないのか。どうして忘れてしまうのか。7 つのパンで 4,000 人が給食出来たのに。これは少なく見積もってということです。男の数だけで 4,000 人ですから、女子供の数は含めていない数ですから。1 つあれば充分すぎるわけです。なぜ見ないのか、なぜ聞かないのか、なぜ悟らないのか、理解しないのかと。イエスは弟子たちのことも見てため息をついておられるようであります。「悟らないのですか」という言葉が 2 回も使われています。弟子たちの霊的理解の鈍さ、これを厳しくとがめているようです。早とちりして彼らはパンのことを気に始めたわけですが、イエスは“パン種”のことを言われていたわけですが、パンではなくてパン種のことを言われたわけですが。それは、イエスがここから霊的真理をまたお語りになるわけですが。でも彼らはそれに対して心が堅く閉じている。*印が付いていて欄外には『或いは「鈍くなって』とあります。他にも“頑なになって”とも訳せる言葉ですが、ギリシャ語は「ポラオー」という言葉です。「ポラオー」という言葉は、文字通りは「分厚い皮で覆われた」という原意があります。皮膚が硬くなって、それこそタコのような、魚の目のような状態になっている。それが「ポラオー」という言葉です。心がまさに分厚い皮で覆われていて、心の包皮が付いている状態。心に割礼を受けていないような状態になっているということです。それがもう硬くなってしまっている。それが「心が堅く閉じている」という言葉です。その鈍くなって、頑なになってしまっている状態の時というのはどういう時かと言うと、覚えていない時です。18 節に「覚えていないのですか。」とされています。心が堅く閉じていることと、覚えていないということ。ここには相関性があります。関係があるということです。パンを彼らはすっかり忘れたんです。パンは御言葉を表すとも言いました。御言葉をすっかり忘れる。御言葉の約束をすっかり忘れる。正しい者が物乞いすることなどないんだと約束がある。にもかかわらず、御言葉を忘れるわけですが。そしてパニックるわけですが。心配するわけですが。

またピリピ 4 章 19 節にも約束があります。『また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。』と。こういった御言葉のパンを忘れてしまう。そうすると心が閉じて硬くなっていく。

或いは「これはわたしのからだです。」と聖餐式の時にイエスはパンを私たちにも渡されます。聖餐式はイエスを覚える時です。そのパンはイエスご自身そのものを表しています。そのイエスを忘れる。すると私たちの心は堅く閉ざされていきます。鈍くなるわけですが。

ローマ 8 章 32 節に素晴らしい約束があります。『私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょ。』こういった聖句を忘れるので私たちの心は堅く閉ざされるわけですが。頑なになる、鈍くなるわけですが。霊的に鈍感になるわけですが。覚えていないから、忘れるから。気を付けたいと思います。私たちが御言葉を忘れる時、私たちが御子を忘れる時、聖餐式に与らなくなるとすぐに心が堅くなります。堅く閉ざされていきます。心に肉が覆い被さって、霊的には鈍感になるわけですが。「まだ悟らないのですか。」と。“まだ”。「すぐに悟らないのですか。」とは言っていません。「すぐに理解しないのか。」とは言われません。私たちが鈍いことは、イエスにご承知ですから。まだ悟らないのかと。「これだけ見ているのに、これだけ聞いているのに、これだけ教わっているのに、まだ悟らないのか。」まあいつか悟るといのが示唆されていますが、ここでイエスは嘆いておられます。私たちにも「まだ悟らないのか。救われて何年経つのか。教会に通って何年経つのか。まだ悟らないのか。理解できないのか。」と。

パン種というのは、聖書では罪の象徴です。わずかで本当に目に見えないほどのものでも粉全体を膨らます、悪影響をもたらすというネガティブな意味でパン種はいつも使われます。ここでイエスが危険視さ

れているパン種、それは **15 節**にある「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。」パリサイ人のパン種。パリサイ人はここにも登場していますから、どんな人たちかはもうイメージ出来ると思います。彼らは批判精神旺盛です。律法主義者というのは、あら探し大好き。常に批判精神で人を裁くような人たちです。そのパン種、気を付けなくてははいけません。ヘロデのパン種というのは、これはヘロデ党と呼ばれている人たち。彼らは一言で言えば世俗主義者です。ローマに取り入って、そしてヘロデ王家を再興して、イスラエルという国を牛耳りたいという、ローマ帝国の力を利用しようというそういう人たちはまさに世俗主義であります。この世の力を借りて自分の願望を実現しようとする。そういう精神がパン種です。これはわずかでも入ったら、粉全体を膨らませます。気を付けなくてははいけません。パリサイ人のパン種、わずかでも入れれば、粉全体を膨らませてしまうのです。律法主義、批判精神、ヘロデの種、この世を利用して成功を求める、繁栄を求めるそういう世俗主義のパン種が入るだけで、教会は一気に悪影響を受けて膨らんでしまうということです。「教会は大きくなるから良いじゃないですか。」と言うかもしれませんと言うかもしれません。人が救われて大勢の人たちが通う、集うそういう教会になったから良いじゃないですかと。でもそれは世の終りの教会の姿だとイエスはたとえ話の中でもおっしゃっています。これらが少しでも入りますと、イエスを誤解させたり、イエスの宣教活動を阻害することになってしまう。だから気を付けなさいと言っています。

そして、**22 節**から今度は見て下さい。『**22**彼らはベツサイダに着いた。(このベツサイダというのは「魚の家」とか「漁師の家」という地名の意味ですけれども。あのペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、そしてピリポの出身地です。このベツサイダにおいて成される御業というのは、このマルコの福音書のみに記載されている非常に特異な奇跡、ユニークな奇跡ということですので、是非注目して頂きたいと思います。)すると人々が盲人を連れて来て、彼にさわってくださるよう、イエスに願った。**23** イエスは盲人の手を取って村の外に連れて行かれた。そしてその両目につばきをつけ、両手を彼に当てて「何か見えるか」と聞かれた。**24**すると彼は、見えるようになって、「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます」と言った。**25**それから、イエスはもう一度彼の両目に両手を当てられた。そして、彼が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった。』これがマルコの福音書オリジナルの奇跡の御業です。目の見えない人が段階的に漸次的に徐々に次第に癒されていくと。これは非常にユニークなものです。大抵は1発でとか、一瞬で目が開かれるというケースが多いんですけども、これは2回に分けて段階的に癒されていく。通常の瞬時の完全な癒しとはちょっと異なるということです。ある人たちは、イエスでもやはり人間ですから失敗をするんだと、そのように解する人たちがいます。それは私は全くもってイエスのことを知らない人の見解だと思います。でも真面目に聖書の注解書の中には、イエスも私たちと同じ人間だから1回では出来ない、失敗もあるんだと。それは問題だと思うんですけども、そのようなお方ではないことを私たちは知っております。イエスには失敗はありません。やり直して、仕切り直してということではありません。勿論これには意図があるということです。特別な意味があるということです。それは今までの流れを見て下さい。全部2回に分けています。5,000人の給食が先にあって、4,000人の給食が次に来ると。2回に分けています。またパリサイ人も霊的盲目もあれば、また弟子たちの霊的盲目もあるわけです。このように神様のこれまでの御業というのが2回に分けて2つの出来事を常に対照として比較をしながら展開されてきているということです。そしてこの盲人の癒しにおいても2回に分けて神の働きがなされている。深いということを知って下さい。この盲人というのは勿論他人事と思っはいけません。この盲人というのは私たちのことです。目が見えない私たちです。目があるのに見えていない。耳があるのに聞こえていない。心が鈍いものです。

そして**第二コリント 4 章 4 節**を開いて頂きたいと思います。『**3**それでもなお私たちの福音におおいが掛かっているとしたら、それは、滅びる人々の場合に、おおいが掛かっているのです。(滅びる人々というのは不

信者のことです。) 4 **その場合、この世の神が (サタンが) 不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。』**だから目が見えないのです。だから聖書を読んでも分からないのです。だからイエスを信じないのです。それはこの世の神が、サタンが目をくらましているからです。サタンによって盲目にされているからです。勿論それだけではなくて、それプラス自らの罪の中にあると。罪人は自分で何をしているのかも分からない、まさに盲目状態になります。意図的に神に対して反逆していると。霊的な視界は塞がれて真っ暗になります。ですから目があっても見えない、耳があっても聞こえない状態になるわけです。そんな盲目だった私たち。それがこのベツサイダの人々のように、イエスのもとに私たちも連れて行かれたのです。誰かが私たちをイエスのもとに連れて行ってくれたのです。そうなければ、目が見えないものはどうやってイエスのところに行けるでしょうか。私たちもそのようにして、誰かがイエスのもとに連れて行ってくれたわけです。有難いことです。私たちも同じことをすべきです。目の見えない人をイエスのもとに連れて行く。それが私たちのミニストリーです。これは誰にも出来ることです。私たちが目を開くのではないのです。私たちが人を救うんじゃないんです。私たちの仕事は、イエスのもとに目の見えない人を、この世の神によって目をくらまされている人を、自分の罪の中で盲になっている人たちを連れて行くことです。それが私たちの役割であり、誰にでもこれは出来ることであります。

23 節を見て下さい。そして**イエスはその人を村の外に連れて行かれた**、とあります。村の中ではなくて村の外にわざわざ連れて行ったのは、この盲人の癒しが所謂見せ物にならないように、所謂マジックショーにならないように、敢えて人目に付かないように村外れに行かれたわけです。人目のないところに行ったわけです。今日のミニストリー、特に癒しの集会。どうでしょうか。群衆の前で、会衆の前で癒しの伝道者が手をかざして癒してみせる。見せ物です、ショーです。イエスとは全然違います。イエスはわざわざ村の外に連れて行かれた。人々の目にさらされないように、公衆の面前ではなくて、まさにプライベートのあるところで。そこは全然違います。私たちの中で癒しの働きとか、癒しのミニストリーということを考える時、身の回りで行われていることと、そして福音書の中にイエスが行われていることにどれだけの差があるのか、違いがあるのか、ギャップがあるのか。しっかりと考え、吟味しなければなりません。

これは前にも紹介しましたが**ヤコブ 5 章 14 節**では癒しのミニストリーとしてこのような規定があります。『**あなたがたのうちに病気の人がいますか。その人は教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を塗って祈ってもらいなさい。**』病気が人がいたらステージに上らせなさい、とは書いてありません。病気が人がいたら教会に連れてくるとか、または癒しの集会に連れてくる、とは書いてありません。その人は教会の長老たちを自分のいるところに (病院でも家でもいいですが) 招いて (1 人ではありません。長老たちという複数形です。)、そして主の御名によってオリーブ油を (これは当時の薬です。) 薬を使って祈ってもらいなさい。勿論オリーブ油は聖霊のシンボルですから、聖霊の賜物がやはり発揮されて、それは薬を使えば自然的、あるいは超自然的にも聖霊が働いて癒される。イエスの名によってどういう方法でも、どういう形でも、長老たちによって。複数によって。なぜ 1 人ではないのか。それはその人 1 人に手柄が行かないためです。この人が祈ったから癒された、という話にならないためです。皆で祈ったら、誰が祈ったかとか、そんなことは気にも止まらない。神に栄光が自然に帰せられるわけです。でも 1 人の人が祈って癒されたとなると、「この人が素晴らしいから。この人が聖霊の器だから。」ということで栄光はその個人に行ってしまうわけです。神はそれを嫌いますから、教会の長老たちを招いて。これはショーではないから。人が大勢いるところではなくて、その病人がいるところに招きなさいと。今日の癒しのミニストリーのあり方とは大分違うのかもしれない。聖書から外れたような働きをしているならば、それは聖霊の働きではなくて、そうでない霊の働きだということです。

そしてイエスはこの盲人に対しては、「**両目につばきをつけて**」とあります。つばき、唾液のことです。

これも7章でちょうど見たわけですが、7章23節にもイエスはご自身の唾液を使われたわけですが、そしてこれは先週も話した通り、これも薬です。イエスは薬も使われる。唾液という薬です。酵素が重要な役割を果たすと言いました。虫歯予防にもなる。血止めにもなる。口の中を切っても唾液によってすぐに止血が出来ます。驚くべきスピードです。修復剤も含まれているわけですが、また若返り成分も含まれていて骨や皮も造る。視力も回復すると。唾液がそのような効果を持っているということが最近分かってきたわけですが。解毒性もあるので抗がん剤にも転用されていくと。凄いですね。それが人間の唾液です。これは自然治癒の中に神が与えられたものでもあります、イエスの唾液は特別だったと思います。私たちの唾とは訳が違うと思います。イエスには虫歯がなかったと思います。ですからイエスの唾液だったら汚いと思わない、むしろ塗って欲しいくらいです。ここで言いたいのは、イエスは薬も使われたということです。自然治癒も使われた。何度も言うように、薬が癒すものではありません。医者が癒すものでもありません。祈りが癒すのではないのです。癒すのは癒し主、ヤーウェ・ラファ「わたしは癒すもの」と呼ばれるお方です。ですから神はあらゆる手段を用いて私たちを癒し、ご自身の御業をなされるということです。唾ですら使われる。自然治癒も、医療も、薬も、そして祈りも使われる。そしてイエスの癒しにはそのようなマニュアルは無いということです。私たちはすぐにマニュアル化しようとはします。イエスの名によってとか、イエスの血潮によってとか、「悪霊よ、出て行け。」とか、いろいろ決まり文句をすぐに使いたくなります。でもイエスのミニストリーを見て頂くと、イエスの癒しを見て頂くと、毎回毎回同じではないということです。マニュアル通りにイエスは動いていないということです。ケースバイケースです。触れる場合もあれば、触れずに遠くから言葉だけで癒す場合もあります。唾を使う場合もありますし、イエスは決まった方法で毎回癒しをされたり、奇跡を行なうわけではないということです。

次に24節を見て頂くと、彼は最初はすぐに見えずにぼんやりと見えるようになったと。完全に視力が瞬時に回復したわけではなくて、なんとなくぼやけて見えるようになったと。「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが見えます」と言った。」と。1回目はそうだったわけですが、24節の「見える」というところに*印が付いています。欄外に「見上げて」とあります。彼は見上げて。イエスにその目を触れられて見上げたわけですが、この「見上げる」という言葉はやはり読み過ぎしがちの言葉ですけれども、キーワードになりますから注目しておいて下さい。彼は見上げて。イエスに触れられたら見上げたわけですが、すると見えるようになったわけですが、イエスを見上げたと思われま。その後、なんとなくぼやけて見えるようになったと。人が木のように見えた。歩いている姿が確認できたわけですが。興味深いことに聖書では、人は木にたとえられます。イスラエル、ユダヤ人のことは、よくオリーブの木とか、いちじくの木とか、ぶどうの木。「わたしはまことのぶどうの木である。あなた方はその枝です。」とイエスもヨハネの福音書15章で、私たちを木、或いは木の枝にたとえられました。私たちが人のことがぼやけて見えます。今までは盲目でした。全然全く見えない、全盲だったわけですが。でもイエスに触れられて、そしてイエスを見上げたならなんとなく人がぼやけて見えるようになった。木のように見えるようになる。完全には見えません。その人を見て、でくの坊と見えるわけですが。唐変木と見えるわけですが。或いは性根の悪い人間と見えるわけですが。根も葉もない噂ばかりを立てる人、木のように見えるわけですが。

でももう一度イエスは触れられます。するとどうなるのか。25節を見て下さい。『それから、イエスはもう一度彼の両目に両手を当てられた。そして、彼が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった。』と。2回目、2段階に分けてです。「彼が見つめていると、すっかり直り」と。これがイエスの成されたことです。最初はぼんやりとしか見えなかったものを、敢えてその状態を許されて、敢えてそのように見えることをお許しになって、そして2回目にはすべてが見える、ハッキリ分かるようになる。2回に分けて徐々に、最初はぼやけて木のように、でも次には2回目には、すべてがはっきり見えるようになったと。繰り返し繰り返しイエスに触れて頂くことによって、繰り返し繰り返しイエス

に語って頂くことによって、見えなかった目が、完全に最初は見なかったんですが、徐々にぼやけて最初は見えるようになって、その後に完全に見えるようになっていく。イエスは今日も同じ働きを私たちにもして下さっております。

救われた時はそれこそイエスに目に触れて頂いて、救われたばかりの頃はぼんやり。今でもそうかもしれませぬ。第一コリント 13 章 12 節にはこう書いてあります。『今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。』今、私たちはぼんやり見ているわけです。でもその時というのは具体的には、イエスと顔と顔を合わせる携挙の時です。携挙の時にはすべてがハッキリ見えるようになる。すべてがハッキリ分かるようになる。今は分からないことがいっぱいあります。「何故ですか。どうしてですか。」ぼんやりとしか見えませぬ。「木にしか見えませぬ。あの唐変木。あのでくの坊。根も葉もない噂ばかりを立てる人。あの性根の腐った人。」木のように見えます。でも、いつか私たちはすべてをはっきり見るようになります。クリスチャンと呼ばれる人たちの中にもでくの坊がいっぱいいます。クリスチャンと呼ばれる人たちの中にも唐変木がいっぱいいます。クリスチャンと呼ばれる人たちの中にも根も葉もないことを言うような人たち、性根の腐りきったような人たちもいっぱいいます。でもいつか、今はぼんやりとしか彼らのことをそのようにしか見えないうけれども、でもいつか本当の姿を見えるようになります。

イエスは私たちに「**敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。**」と、難しいことを命令されました。でもこれはイエスの命令ですから、「難しくてもやります。」と。感情が伴なくても、敵を愛しなさい。好きになりなさいと言っているのではないです。愛しなさいと言われているのです。好きになるとは訳が違いますから、混同しないで下さい。愛するということです。愛することを選ぶということです。赦すことを選ぶということです。感情が伴うか、伴わないかは関係なくです。好きになるか、ならないかは関係なく。そして「**迫害する者のために祈りなさい。**」と、これを実行し始めてみて下さい。そうすると驚くべきことが起きます。憎らしい人たちのために、そのでくの坊や唐変木のために祈り始めますとどうなるのか。気が付いてみたら、もうその人のことを憎めなくなります。ぼやけて最初は彼らのことが、もうそんなふうには見えなかった。木にしか見えなかったわけです。でもイエスに触れられて、イエスの言葉を繰り返し繰り返し聞いて、それに聞き従うにつれて私たちはだんだんと目が見えるようになってくるわけです。あなたが彼らのために祈り始めますと、もうあなたは彼らのことを憎めなくなります。あんなに憎たらしかったのに、祈りはじめた途端に、祈っているうちに、だんだんそのようにはもう思えなくなってくる。不思議なことです。それが、御言葉に触れられると起こることです。御言葉に従うと私たちの心のうちに起こることです。何回も何回も、繰り返し繰り返し、イエスはあなたの目に触れて下さいます。今はぼやけてしか見えなくても、イエスは何度でも触れて下さいます。この盲人はたまたま 2 回でしたが、私たちは 20 回、200 回、或いは 2000 回触れてもらわないと、全然見えない重症患者かもしれません。或いは見ようとしないうかもしれません。ただ、イエスの手に余るような患者は 1 人もいないということも忘れないうで欲しいと思います。ここでイエスは 2 回に分けたというのは、これまでの経緯を振り返ってこれは意図があるということも言いました。弟子たちの霊的視力回復のために、これが 1 つの教材となったわけです。この人が弟子たちの霊的視力を回復するための教材となったわけです。一番、目が見えてなくてはいけなかったパリサイ人、聖書の専門家たち、それが一番、目が見えていなかった。そのことを暴露するための 1 つの教材ともなったわけです。私たちもぼんやり見えています。完全に見えていません。私たちも或いはパリサイ人のように全く見えていないかもしれません。それは私たちの批判精神、律法主義で人を見下して「自分は正しい、相手は間違っている」そのメンタリティ。だから見えないうです。だから分からないんです。

25 節に使われている「見つめている」という言葉は、実は「見上げさせると」という言葉です。英語の聖書では Look up という英語になっています。「見つめている」とは厳密には「見上げさせる」と。イエスが私たちの目を下ではなくて上に見上げさせて下さるわけです。上というのは地上ではありません。上というのは目に見える人のことではないです。天国を見上げるということです。天国思考、永遠思考になるということです。そうすると今までとは違う見方が出来るようになるということです。クリスチャンと呼ばれている人ならば全員もれなくキリストと同じ姿に変えられます。今は唐変木でもです。今はでくの坊でもです。必ず天国においてはその人はキリストとそっくりさんになるんです。今、隣の人を見てもそう思えないかもしれません。全然キリストには似ても似つかない人、かけ離れていると思う方かもしれません。そのようにぼやけてしか見えないのは、地上を見ているからです。その人自身を見ているからです。でも天に目を上げて見てみたら、全然違って見えてくるわけです。今、隣にいる人とはあなたは永遠に天国と一緒に過ごす人です。その人は必ずキリストと同じ姿になって、携挙の際にはそれが実現するんです。これは凄いことです。キリストのうちにある者を、そのように見て下さい。イエスを信じている者はキリストのうちにある者です。どんな唐変木でもキリストのうちにある者です。それがその人のポジション、立場です。神から見るとその人はキリストの中にあるわけですから、見た目はキリストそっくりということです。そして、その人はキリストに似た者となるということ、これも分かっていることです。そのようにして私たちの目が、視界が、視力がイエスに触れることによって漸次的に、段階的に変えられていくということです。霊的視力は回復するということです。このこともイエスの働きだということ覚えて、私たちの今視力はあまり良くないかもしれません。「どう見たってこの人は唐変木でしょう。どう見たってこの人はでくの坊にしか見えません。」と、それは仕方のないことです。ですが、イエスに触れて頂ければあなたは人を正しく見る事が出来るようになります。

またテキストに戻って頂いて、26 節から『そこでイエスは、彼を家に帰し、「村に入行って行かないように」と言われた。』これは先程も触れた通り、見世物にならないように、サーカスのようなショーにならないように。もう一つその後を見て頂くと『²⁷それから、イエスは弟子たちとピリポ・カイザリヤの村々へ出かけられた。』とあります。これからイエスはピリポ・カイザリヤというところで弟子たちと水入らずのプライベートな時を過ごそうとされているわけです。でも、もしこの目の開かれた盲人が村に入行って行ったら群衆たちがやって来てイエスの周りに集まってしまいます。そうすると弟子たちとプライベートが持てないわけです。ですから村に入行って行かないようにと、ここで命令しているわけです。ピリポ・カイザリヤというのは、ちなみにヘルモン山の麓にあるリゾート地です。万年雪が溶けて、このピリポ・カイザリヤから水が湧いて、これがヨルダン川の源泉となっている美しいところです。イエスは弟子たちをそのようなリゾート地に連れて行ったんです。まさに修養会を開いたわけです。リトリートです。時に私たちに必要なことです。信州に居たら、もうここに生活すること自体がリトリートみたいなものですけれども。自然豊かなところでイエスと水入らずの時間を持つ。クリスチャンには絶対不可欠なことです。

そのピリポ・カイザリヤでイエスはプライベートな時間を弟子たちと過ごされます。その続きを見て下さい。『²⁷その途中、イエスは弟子たちに尋ねて言われた。「人々はわたしをだれだと言っていますか。」』これが私たちにとって、人類にとって最も大切な質問です。人々はイエスをだれだというかと。

28 節に『彼らは答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人も、また預言者のひとりだと言う人もいます。」』世の終りにはエリヤが現れるということも旧約聖書には預言されています。「また預言者のひとり」というのは、モーセのような預言者、第二のモーセ。これもひとつメシアの称号ともなっています。いろいろとイエスの評価が分かれていたわけです。イエスの見方、イエスの評判というのは千差万別だったわけですが、29 節で『²⁹するとイエスは、彼らに尋ねられた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」（一般的にはイエスのことは今日大体キリスト教の開祖とか、

聖人の1人、道徳の教師の1人とか言われますけれども、私たちはイエスをだれだというか。) ペテロが答えてイエスに言った。「あなたは、キリストです。」³⁰するとイエスは、自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた。』この記事は非常に簡略化されておりますけれども、マタイの福音書の方では、ここは詳しく学んでまいりました。マタイ 16 章に並行記事があります。ですからそこを繰り返して言うつもりはありませんが、ペテロのこの信仰告白は、彼自身が生み出した彼の発想・アイデアから出たものではなくて、これは天の父がペテロに啓示した信仰であったわけです。それをそのままペテロは告白しただけです。天の父が教えて下さったから分かったわけです。自分の頭で理解して分かったのではないです。あなたにとってイエスは誰なのか。いつもこのことを自問自答して頂きたいと思います。クリスチャンだったら、イエスはキリストであると。生ける神の子キリストである。それには異論はないと思います。でも私たちはすぐにイエスが誰であるのかを忘れます。頭では分かっているつもりでも忘れます。本当にイエスがあなたのキリストならば、なぜあなたは思い煩うのですか。本当にイエスがあなたのキリストならば、どうしてあなたは恐れるのですか。本当にイエスがあなたのキリストならば、どうしてあなたは人を赦さないのですか。本当にイエスがあなたのキリストならば。そのことを自問自答して頂きたいと思いません。キリストというのは、“油注がれた者”です。イエスの苗字ではありません。名前はイエスですが、キリストは苗字ではなくて、キリストは称号・肩書き・タイトルです。“油注がれた者”という肩書きは、王であり、祭司であり、預言者であるということです。イエスがあなたの王ならば、あなたはイエスにすべての生活の必要を満たして頂き、イエスに全て守って頂く。イエスがあなたの王ならば、何を恐れる必要があるでしょうか。サタンだって手が出せないわけです。あなたの生活を支配されている、あなたの上に君臨されているお方が誰なのか忘れてはいけません。サタンが君臨しているのではありません。時の権力者が君臨しているのではありません。イエスがあなたの王です。イエスはあなたの祭司です。神と私たちの間をとりついで下さる方です。この方がおられればあなたはいつでもとりなしを受けることが出来ますし、いつでもあなたは神とつながることが出来るということです。この祭司はあなたに同情することの出来ない祭司ではないとヘブル人への手紙にもあります。あなたに寄り添って下さるお方だということです。あなたはひとりぼっちではありません。イエスはあなたの預言者ですか。そうであるならばイエスは常にあなたに必要な御言葉を語って下さいます。預言者としてあなたの行くべき道を必ずこの方は示して下さい。もう迷う必要はありません。イエスがあなたのキリストならば、預言者がどうすべきか語ってくれます。今現状がどうなのか、語ってくれます。何をすべきか、イエスが預言者としてあなたに全てを告げてくれます。あなたにとってイエスは誰ですか。本当にキリストでしょうか。本当に王でしょうか、祭司でしょうか、預言者でしょうか。ことある度に、瞬間瞬間、このことを自分に問うて下さい。自問自答して下さい。そうすることによって私たちは、毎回毎回キリストの取り扱いを受けることになります。キリストが、あなたのキリストが、あなたの人生に働いて下さいます。救われる時に問われる質問だと思っているかもしれません。「クリスチャンはもうこの質問は卒業した。」なんて言わないで下さい。クリスチャンでもイエスがキリストであることをすぐ忘れるからです。イエスは弟子たちにこのことを問いました。あなたもキリストの弟子で、問われています。「あなたはわたしを誰だと言うのか。」隣の人は、世間一般の人はどうか。そんなことを聞いているのではありません。あなたはイエスを誰だと思っているのか。個人的な質問です。イエスはあなたと個人的な関係をお持ちになりたいわけです。

今度は 31 節を見て下さい。『それから、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。』“それから”、いつからでしょうか。ご自分が、イエスがキリストであるということが啓示されてからです。イエスがキリストであるということが啓示された、それが示された、それが認知された、それが理解された、それが信仰告白された、そのときからです。そのときから何が教えられたかと言いますと、イエスの受

難です、苦難です、十字架の死です。茨の道が説かれていったわけです。この話がされるタイミングというのは、イエスがキリストであるということが啓示されてから。ここに注目して下さい。いきなり受難の話をしているのではないです。いきなり十字架の死の話をしているのではないです。まずはイエスがキリストであるということが示されてから、認知されてから、理解されてからのその次に来た話。その次に続くキリストのメッセージということなのです。

32 節。『しかも、はっきりとこの事がらを話された。(はっきりと。明確に、直接的に、率直に。もうたとえ話は一切していません。もうそのままです。ストレートです。) **するとペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。』**イエスがペテロをいさめるなら分かります。でもここではペテロが師匠のイエスをいさめ始めたとあります。特にこのギリシャ語のニュアンスでは、「いさめ始めた」というのは、「続けて、継続的にイエスをいさめた」ということです。いさめ続けたということが言われています。1回2回ではないです。何度も何度も「お師匠様、何をおっしゃっているんですか。とんでもない発言です。なんでそんな弱気になるんですか。そんな自殺行為をほのめかすなんて。弱気にならないで下さい。もっと強気で。」何度も何度も「それは失言です。私たちの士気が下がります。もうそんなことをおっしゃらないで下さい。否定的なことを言えば否定的なことが起きますから、気を付けて下さいよ。」とか、いろいろなことをいさめたと思います。

そして、そうしたペテロに対してイエスは何とおっしゃったか。『³³しかし、イエスは振り向いて、弟子たちを見ながら、ペテロをしかって言われた。「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」』イエスから「下がれ。サタン。」と言われたらどうでしょうか。凄いショックですね。イエスから「下がれ。サタン。」と。私たちも言われかねないということもここで覚えたいと思います。「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」それがサタンだと言っているわけです。神のことを思わないで人のことを思うこと、それがサタンだと。永遠ではなくて、まさに目先のこと、この世の一時的な繁栄のこと、永遠ではなくて。ペテロがその直前には、天の父の啓示を受けて「あなたはキリストです。あなたは生ける神の子キリストです。」と素晴らしい模範解答をしたわけです。でもここではいきなりサタン呼ばわりされています。天の父から素晴らしい啓示を受けたその直後にサタン的なことを発言している。もの凄いアップダウンです。でもこれを見ると私たちは他人事とは思えないと思います。私たちが例えば聖書を読んでバイブルスタディーとかで、または礼拝等で神から素晴らしい啓示を示されて、そして素晴らしい信仰の言葉を発言し、そして私たちはその後家路に就きます。そうしたら突然、神のことを思わないで人のことを思うようになって、まさにサタン的な発言をするようになる。永遠を思わないで、この世の一時的なことを思うようになる。

ウィリアム・ペンという人、ペンシルバニア州のその“ペン”というのは、ウィリアム・ペンの名前から来ていますが、その開拓者、クリスチャンです。ウィリアム・ペンは有名な言葉を残しています。

No cross, No crown. (十字架なしに、王冠なし)

碎けて言うならば、「患難なくして、栄光なし」ということです。患難というのが十字架。栄光というのが冠です。イエスがおっしゃりたかったのは、そこです。ペテロは「十字架刑なんて、そんな恐ろしいこと、おぞましいことを口にしないで欲しいです。」と。「あなたにふさわしいのは王冠です。あなたはメシアです、キリストです。」でもここでペテロの言っているキリストというのは、政治的な軍事的なキリストです。ローマ帝国のその圧政からユダヤ民族を解放する、そういう解放者としてのメシアを想定しているわけです。でもイエスはこの世にイスラエルという国を独立させるために来られたのではなくて、イエスは霊的なメシアとしてすべての人を救うために来られたわけです。罪からの救い主として来られたわけです。そのためには十字架の道をたどらなければいけなかった。というのは、罪の救いをもたらすためには、自分自身が罪の罰を代わりに負わなければいけなかったからです。代わりに死ななければならなかったか

らです。木にかけられてのろわれたものとならなければ、私たちを、罪人を救うことは出来ない。そうしなければイエスは3日目によみがえることもない。天に上げられることもない。**No cross, No crown.**です。「十字架なしに、王冠なし」です。「患難なくして、栄光なし」です。でも、ペテロそれをいさめたんです。「そんな否定的なことを言っ**て**はいけない。」日本人もよく言います。「下手なことは口にしない方がいい。否定的なことを言う**と**、ネガティブなことを言う**と**、その通りになってしまうから。」言霊信仰でそういうことを言ったりもします。そして心理学や自己実現の考えに基づいて「私たちは否定的なことは言**わ**ないで、もっと積極的なことを言**い**ましょう。ポジティブ・シンキングで。可能思考で行きましょう。繁栄の福音、繁栄の神学。イメージしたことが具体的にその通りになるように。神様に欲しいものは祈りの中で具体的にイメージして、それを伝えましょう。曖昧ではいけません、抽象的ではいけません、具体的に何が欲しいのか、どういうものが欲しいのか、どういう製品で、どういう色で、どういう形で、どこのメーカーで。」そんなことまで言**わ**せて、具体的に口にすれば、具体的にそれが叶うんだと。ペテロが言**わ**んとしていることはまさにそういう積極指向、可能思考、繁栄の福音、繁栄の神学、prosperity gospel というものです。「罪だとか、悔い改めだとか、自己犠牲とか、自己否定とか、そんなことは口にしない方がいいです。茨の道、とんでもありません。罪からの救いよりも、病気の癒し、事業の成功、人生のその成功哲学。その方が輝かしいし、教会ではそういうことを口にしま**し**ょう。そういうことを説**き**ましょう。信仰があれば癒されます。信仰があれば成功します、金持ちになります。理想的な生活が送れます。目標達成出来ます。」と、そのようにペテロと同じようなメンタリティで今日の多くの教会が、「十字架のことは口にしない。自分を捨てるなんてとんでもない。自己否定、あり得ない。そんなネガティブなことは言**っ**てはいけない」と。

でも、イエスはそういうことを言う人たちをお叱りになるということ覚えて下さい。「あなたは神のことを思**わ**ないで、人のことを思**っ**ている。下がれ。サタン。」と。それはサタンです。神のことを思**わ**ないで人のことを思**っ**うことは、それはサタンです。人のことを一切思**っ**てはいけない、と言**っ**ているのではありません。神のことを思**わ**ないで、人のことを思**っ**う、ということ**で**す。

そして34節に『それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言**わ**れた。「だれでもわたしについて来たいと思**っ**うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』これはイエスがキリストであるということ**を**認識した後のこと**で**す。いきなりこの話から来ていません。いきなりこれを言**わ**れたら誰もクリスチャンにならないと思**い**ます。「クリスチャンになるんだ**ら**、自分を捨てなさい。」いきなりそのメッセージで人々は心を閉ざしてしまうと思**い**ます。その前にイエスはキリストであるということ**で**す。イエスがキリストであるということが分かれば、イエスについて行きたいと思**っ**うわけ**で**す。でもそのためには通らなければい**け**ない道**の**りがあります。避けては通れない。それは自分を捨てること、自分の十字架を負うこと。そしてイエスについて行く。

35節に『³⁵いのちを救おうと思**っ**う者はそれを失**い**、わたしと福音とのためにいのちを失**っ**う者はそれを救**っ**うのです。³⁶人は、たと**い**全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得**が**ありま**し**ょう。³⁷自分のいのちを**買**い戻すために、人は**い**っ**た**い何**を**差し出**す**ことができる**で**しょう。』ペテロはずっと黙して聞いています。素晴らしい信仰告白の直後にとんでもない発言・失言をしたわけですが、それでもイエスはペテロを用いました。ペテロが、イエスがキリストであるという素晴らしい信仰告白をすることを最初から知らなかったとは私は思**い**ません。でも同時にペテロのその後、神のことを思**わ**ないで人のことを思**っ**うようなイエスをいさめ始めるようなそんな発言をするということもイエスは最初から知らなかったとは思**い**ません。最初から分かった上でイエスはペテロ用いたということ**で**す。これは私にとっては大きな慰めです。私**た**ちもイエスをキリストだと言**い**ます。でも、その直後にまさにサタンそのもの**の**ような発言をしてしま**い**ます。そのもの**の**ような言動をしてしま**い**ます。そして自分自身にもが**っ**かりします。神のことを思**わ**ない

で人のことを思って、とんでもない履き違えをしていた、勘違いをしていたと。失言だ、失敗だと。でも、神はそんな私たちの失言・失敗を承知の上で、最初から分かった上で私たちのようなものを召しておられる。時に「下がれ。サタン。」と私たちも言われるわけです。時にイエスにお叱りを受けるわけです。それでもイエスは私たちに「**だれでもわたしについて来たいと思うなら**（もうお前は失格だ、とは言いません。もうお前はサタンのようなことを言ったから、もう私の弟子としてはふさわしくないから、もう絶対ついてくるな、とは言いません。それでも私について来たいと思うなら）、**自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。**」と。この流れに注目して頂きたいと思います。そして、この「**ついて来なさい**」という言葉は、「**アクロセオー**」というギリシャ語で「同じ道を一緒に歩む」という言葉です。イエスと同じ道を一緒に歩むとも解せますし、私たちの道をイエスが一緒に歩いて下さるとも解することが出来ます。あなたはひとりぼっちではありません。たとえそれが茨の道であったとしても、たとえそれが狭い道であったとしても、くねくね道で死の陰の谷を歩くような道であったとしても、イエスは一緒に歩いて下さるということです。

「**自分を捨てる**」というのは、決して簡単なことではないと思います。でも、イエスについて行くためには避けて通れないものです。「自分が自分でなくなってしまうのは怖い。自分の個性というものが失われるのが怖い。自分を捨てるとは一体どういうことですか。」自己否定というふうにも勿論言われる言葉ですけれども。「自己否定というのは自分をなくすことなんですか。」いろいろと皆さんも意見があると思います。この「**自分を捨てる**」ということは、簡単に言えば「**自分を忘れる**」ということです。イエスを見れば分かります。イエスが自分を捨てるという時、それはイエスは自分のことを忘れて父のことを覚えて、民のことを覚えて動かれております。イエスを見れば、もう一目瞭然です。イエスにおいて自分を捨てるということは、イエスは自分のことを一切前面に押し出していませんし、目立とうともしませんし、自分を第一にするなんていうことは一切イエスにおいてはしていません。それが「**自分を捨てる**」ということです。自分自身を見ないし、自分自身に関心も持ちません。関心を持つのは、かわいそうに。自分がかわいそうに、というのは自分を捨てていない証拠です。自己憐憫と言います。かわいそうなのはこの羊たち。羊飼いのいない羊たち。かわいそうなのは三日間も私について従っているのに食べ物もなくてひもじい思いをしてこのままでは野垂れ死にしてしまう、その人たちをかわいそうに。自分はかわいそうに、とは1度もイエスは思っていない。それは自分を捨てるということです。

その一方でイエスが逆説的におっしゃっているのは、「**いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。**」と。自分の命、自分の生活、自分の人生とも置き換えることが出来ると思います。自分がどう思うか。自分がどう感じるか。自分がどのように人に見えているのか。自分、自分、自分と。でもその自分を忘れると私たちはイエスのようになれるわけです。自分を優先しない、自分をかわいそうに思わない、自分を第一にしない、自分自身に関心を持たない。そして自分以外のものに関心を持つ。神の御心に関心を持つ。神の民に関心を持つ。

でも「**自分の十字架を負う**」というのは、これも難しいことだと。イエスは自分の十字架を最後まで負いきりましたか？皆さん知っていると思います。イエスは最後までイエスは自分の十字架を負い切ること出来なかったんです。途中で倒れて、もうこれ以上担い切れなくなったんです。その時に何が起こったかと言いますと、たまたま過ぎ越しのお祭りにクレネ人という北アフリカから来た黒人のユダヤ教改宗者がそこに居合わせて、そしてローマ兵の剣を肩に置かれて「お前がこの男の十字架を背負え。」と言われて、このクレネ人シモンがイエスの十字架を担いで、そして刑場まで、ゴルゴダの丘まで行ったわけです。目標までは行けたわけです。ピア・ドロローサという悲しみの道をイエスは自分の十字架を最後まで、そこまでは負いきれなかったんですが、でもクレネ人シモンが途中でイエスの十字架を負って目標まで、目的地まで到達することが出来たわけです。何が言いたいかと言いますと、私たちも自分で自分の十字架を

最後まで負いきることは出来ないということです。自分の力では自分の十字架を負いきれない。それは無理です、出来ません。皆さんも「私には出来ません。」と率直に思うと思います。自分を捨てて自分の十字架を負ってわたしについて来なさい。「出来ません。」と正直にそう思うと思います。「無理です、私には。」それでいいのです。無理に決まっていますから。無理だから何もしないのではないです。イエスは無理でも背負ったのです。途中で倒れました。でも、その時にクレネ人シモンが来て、その十字架を代わりに負ったわけです。同じようにあなたが倒れても、イエスがそこからあなたの十字架負ってくれます。「すべて、**疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**」と。倒れてもいいのです。最後まで自分の力で担い続けることが出来なくてもいいのです。倒れたって構いません。でも、投げ出さないで下さい。イエスも投げ出さなかったんです。私たちは主を必要とする者です。主なしでは自分の十字架を最後まで担い切ることは、負いきることは出来ません。イエス無しでは無理です。「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない。」とハッキリとイエスはヨハネ 15 章でおっしゃいました。私たちが自分の十字架を負うということは、**自分の弱さを認めてへりくだるということ**です。砕かれるということです。ボロボロになるから担いきれないのです。イエスはボロボロになっていたんです。むち打たれていなければ、大工ですから屈強の肉体をもって十字架を背負うぐらい訳なかったと思います。材木を運ぶなんて大工の仕事です。でも、この時にはもう瀕死の状態です。もうむち打たれてボロボロだったんです。血も流していました。大量出血です。筋肉ズタズタです。骨も見えていました。内臓も飛び出る寸前です。徹夜でした。体力の限界です。その前にはゲッセマネの園で血の汗が出た、血汗症でもう極度のストレス障害でかなり体力が落ちていたはずですが。それでもイエスは十字架を負ったんです。最後まで運べないことは分かっているけど十字架を負ったんです。出来ないことが分かっても負ったんです。でも、そこにクレネ人シモンがやって来たんです。そこにイエスがやって来ます。

クリスチャン生活を自力で最後まで立派にやりきる、なんて思わないで下さい。無理です、あなたには出来ません。自分 1 人ではとても無理です。でも、クリスチャン生活にはイエスがキリストですから、ここに来て下さるわけです。「わたしについて来なさい。」イエスと一緒に歩くことだと言いました。

第二コリント 13 章 4 節は非常に興味深い聖句だと思います。『**確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きているのです。**』

もう 1 箇所パウロの言葉としてガラテヤ 2 章 20 節『**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。**』と。自分の命というのはまさに自分のために生きる命です。これを捨てなければ私たちは何も得られない。惨めになる一方だということです。自分がどう思うか、どう思われるか、どう感じるか、どう見えるか、そんなことばかりです。もう自分から離れられない、自分に縛られたままです。でも自分を捨てることで、自分から離れることで、私たちは解放されます。でも自分の命、自分のために生きるというそのメンタリティー、これを持ち続けるならば、私たちは最後は何も得ないということです。大損するということです。

『**人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。**』何の得があるのかと、もう一度考えてみて下さい。「私は今イエスキリスト信じることができません。」それで何の得がありますか。イエスを信じないということは、魂をサタンに売り渡すと等しいことです。この世の神に売り渡すということです。「そんなこと嫌です。考えたくもありません。考えたこともありません。」と。考えて下さい。今あなたは自分の魂をサタンに、悪魔にいくらで売りますか。何億で売りますか。何十億で、何百億で売りますか。「否、そんな。いくらでも売りたいありません。そんな、お金では換算出来ません。私の魂、私の命をサタンに何億だろうと、何百億だろうと積まれたって、私は絶対に売れません。」と普通はそう思う

と思います。誰だってサタンにそんなお金で自分の魂を売りたいなんて思わないと思います。普通に考えれば、売ることはないと思います。ところが、「今私はイエス・キリストを信じることが出来ません。」と平気でそう言って、何をするかというと、サタンに魂を売り始めるんです。「今は私には他にやることあるんです。今忙しいです。私には仕事があります、家族があります。私には先祖からの伝来の宗教があります。仏壇があるんです。お墓があるんです。教会には行きません、忙しいですから。」それは何を意味するかというと、サタンにあなたの魂を売っているんです。そのはした金で。「今日は教会にいけません。仕事があるからです。かき入れ時ですから。」そのはした金のためにあなたは自分の魂を売っているんです。そのしけたお金を得るために、自分の魂をサタンに売っているんです。「今イエスを信じられません。」と言う人は、あなたの魂をサタンに売っているんです。「何の得がありますか。」とイエスはおっしゃっています。

詩篇 49 篇 6 節からちょっと読んでみたいと思います。『**おのれの財産に信頼する者どもや、豊かな富を誇る者どもを。**⁷人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。自分の身代金を神に払うことはできない。⁸たましいの贖いしろは、高価であり、永久にあきらめなくてはならない。⁹人はとこしえまでも生きながらえるであろうか。墓を見ないであろうか。』忘れてはなりません。私たちは自分のお金で自分の魂を買い戻すことは出来ない。救いは自分の力では得られないのです。どんなに頑張っても、どんなにお金を積んでも、サタンからは買い戻すことは出来ないんです。でもイエスはご自分の命そのものをもって、命の代価をもって私たちを贖って下さったわけです。「イエスを信じます。」と。そこには計り知れない得があります。でも「イエスを信じない。」と言うならば、そこには計り知れない損失があります。「何の得がありますか。」とイエスはおっしゃいます。クリスチャンになって損した人はいないと思います。何度も言いますが、死ぬ間際で自分がクリスチャンになったことを後悔した人に私は 1 度も出会ったことはありません。勿論クリスチャンになっているいろいろな辛いことがあって、クリスチャンならではの悩みがあります。クリスチャンでなければ悩まないことがあるわけです、葛藤があるわけです。「こんなことだったらクリスチャンにならない方が良かった。ノンクリスチャンの方がなんか楽しそうに生きている。何の悩みもなさそうだ。」と。でもよく考えてみて下さい。あなたがノンクリスチャンだったら、どうなのかということです。何の希望もないのです。それを忘れて私たちは、またノンクリスチャンに戻ろうなんて思い違いをする愚か者です。「こんなことだったらクリスチャンにならない方が良かった。」とんでもない発言です。地獄に行くだけです。魂をサタンに売っているんですから。あなたはもう囚われ人です。サタンの捕虜です。罪の奴隷です。そこに戻りたいなんて馬鹿なことを言うてはいけません。またエジプトに戻ろうなんて、馬鹿なことを考えてはならないと。「何の得があるのか。」と、イエスはおっしゃいます。

最後に 38 節に『**このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるような者なら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人のことを恥じます。**』イエスとイエスのことばを恥じる。クリスチャンの中にはイエスのことを恥じる人はいないと思います。でもクリスチャンの中には意外とイエスのことばを恥じる人がいます。聖書の言葉を言うと何か馬鹿にされるかもしれない。御言葉を宣べ伝えることに躊躇する人があると思います。でもイエスはハッキリとおっしゃっています。わたしとわたしのことばを恥じる者。恥ずかしいなんて思わないで下さい。イエスのことば、福音のことばです。これは人を救うことの出来る力のあることばです。これを恥じるなんて、とんでもない話です。クリスチャンならばイエスを恥じるという人はいないはずですが、でもクリスチャンなのにイエスのことばを恥じている人は大勢います。語れない人が大勢います。恥ずかしいと思っているからです。馬鹿にされると思っているからです。「お前、未だに聖書なんか信じているのか。ただの神話だろう。聖書なんか読んで何になる。そんな話、聞きたくもない。ただの宗教書だろう。ただの道徳の教科書だろう。」そんなことを言われて萎縮して恥じ入ってしまう人がこの中にあるでしょうか。そういう人

は、イエスの言葉を思い出して下さい。「このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことを恥じるような者なら、人の子も（イエスのことです）、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るときには、そのような人（そのようなあなたを、私）を、イエスが恥じる。」とされています。常に私たちは自分の立場を明確にしなければならないということです。公に表明しなければいけないということです。心で信じるだけではなくて、口で告白しなければいけない。モーセがシナイ山から降りてきた時、麓では金の仔牛を作り上げて人々はその周りで裸踊りをして、いきなり十戒を破っていたわけです。「わたしの他にほかの神々があつてはならない。自分のために偶像を造つてはならない。」いきなり破っているわけです。モーセはそれを見て、折角神によって刻まれた2枚の10の言葉の刻まれたその石の板を地面に叩きつけて、粉々に砕いてしまったわけです。そしてモーセは言いました。「主につく者はないか。」と。そこでレビ人だけが主とモーセについたわけです。そしてそのレビ人が、偶像礼拝者たちを皆剣にかけて裁いたのであります。それ以来、本来イスラエルの全部族が、長子が祭司の役割を果たしていくところを、レビ人たちだけが祭司の役割を果たす聖職者としての特別に選ばれた部族となつていったわけです。レビ人は公に自分たちの信仰を表明したわけです。主につく者は誰か。「私と私の家とは主に仕える。」と、ヨシュアは言いました。公の場で自分の立場を表明するということです。エリヤは言いました。「主につくか、バールにつくか、どちらかにせよ。」と、常に私たちはそのように神の前で選択を迫られます。どっちつかずではダメなんです。人にどう思われるか、皆さんは心配にならないと思うかもしれませんが。でもそのような人は、どっちつかずの人は、イエスが恥じると言っています。

今日はこれで終わりになりますけれども、私たちはクリスチャンになつてからも人生バラ色だということではなく、世にあつては患難があるということ、イエスの言葉通りであるということ、日々実感していると思います。でもその都度その都度、イエスの言葉を思い出さなければいけません。「わたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

C. S. ルイスは「私たちが自己というものを除去してキリストに自己を支配してもらえらうほど、私たちはますます本当の自分になることができる。」と。実は本当の自分になれるんです。自分を捨てることによって、自分の十字架を負うことによって、そしてイエスについて行くことによって。絶対に勘違いしないで下さい。「自分を捨てるなんていうことは、自分をなくすことで、個性を失うようなことで、自分が自分でなくなるようなことで怖いです。」と。そんなことは絶対にありません。逆です。却つてあなたは命を見出すと、イエスはおっしゃっているんです。

また A. W. トーザーはこう言いました。「自己否定ということは、個人的苦痛や苦行を課することではない。自己否定とは、自分のために生活するという原則を断念することである。私たちの存在と意思の方向を完全に換え、もはや自分にどのような影響があるかを基準に行動するのではなく、神と他の人々にどのような影響を及ぼすかという一事に思いを寄せるようにさせるものである。」と。これがクリスチャンの生き方です。全然視点が違う。見ているところが全然違うのです。私たちの目も開かれる必要があります。どこを見えていますか。何も見えていないでしょうか。或いはぼやけて見えているでしょうか。私たちの霊的視力は如何ほどでしょうか。今晚そのことが一人一人に問われております。でもイエスは必ず触れて下さいます。必ず霊的視力は回復されます。最後にはすべてハッキリ見えるようになる。最後には分かるんです。今分からないことでも最後には分かるようになりますから、苛立たないで下さい、焦らないで下さい、やきもきしないで下さい、右往左往しないで下さい。今は見えなくても最後には見えるようになる。最後には悟る、最後には理解出来るんです。でも、それは私たちの努力によるのではなくて、イエスが触れて下さるから、イエスが継続的に語って下さるからです。イエスのタッチがなければ、私たちは未だに盲目のままです。イエスの語りかけを受けなければ、それに応答しなければ、私たちは未だに目の見えない状態で、不自由な状態にあるということです。今晚この時間イエスが皆さんの目にも触れて下さったと思いま

す。イエスがつばきをかけて、言葉をかけて、だんだん目が、心の目が、霊の目が、信仰の目が開かれるようになる。これがこのバイブルスタディーでイエスが私たちにも成して下さることだということですから期待して下さい。これを重ねれば重ねるだけもっと見えるようになるということです。1回ではない、2回、3回、4回、何回でも見えるようになるまで、私たちがそれを拒まなければイエスは見えるまで続けて下さいます。では、今日はこれで終わりたいと思います。